

阿部倬也編

後醍醐天皇

古典文庫

阿部倬也編

次曜物次曜礎

古典文庫

古典文庫第五八一冊

平成七年四月二十日印刷発行

非売品

編者 阿部 倬也

発行者 吉田 幸一

印刷者 共立印刷株式会社

製本者

洗濯物洗滌俳諧

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 (三九一〇) 二七 一七
振替口座 〇〇一九〇一九 一四五九七番

洗濯硯 第一

い

出

胎荷

珍具

ふ橋寺に想はまはふり
ニケぢりいふなり

凡坂 漆草 伏見 竹田

森森

東福寺

法光寺 一二橋

板屋

砂

名かこ
鹿茸

茶室

物手

無法

命如

東寺

いちぢり寺有恩寺に於て大師
スミシテ守護神は恰良イヨ

三ノ枝

つみく

カガ
ウツカ

のり

カモリ東七条三白家坂
田中昭神

田中昭神

拾遺

遊乃承ゆりてもまいるり七日の初めしちーとやぞん

きん

約む

いさつのも品おまけゆうなも

かてのもまゝの月あつハちちうてよ天くても作

日

『洗濯硯』上巻の内題及び本文冒頭部分（柿衛文庫館所蔵）



『洗濯碁』 絵図 1 〈35ウ〉 (同館所蔵)

[illegible]

— 4 —

目次

凡例……………七

『俳諧洗濯物』 四卷四冊 寛文六年序……………二

『洗濯碓』 二卷二冊 刊年未詳……………一七

解説……………三五

『俳諧洗濯物』 住国・作者別収録句索引……………四九

凡例

一 天理図書館綿屋文庫蔵『俳諧洗濯物』四卷、及び柿衛文庫蔵『洗濯礎』二卷（共に版本）を底本とし、忠実に翻刻した（翻刻許可番号 天理図書館第七一三号・柿衛文庫第一三号）。

二 漢字及び仮名（平仮名・片仮名）の別はすべて底本に拠った。

三 漢字は、旧字体・異体字・略字・俗字等を、原則として現行の字体に改めた。

四 仮名の表記は、原則として現行の文字に拠った。

五 明らかな誤字、實在しない文字については、正しい文字を注記するか、或いは、推定し得る該当文字を□内に示した。また、当て字などにはママ印を付けた。

六 虫損・版欠け等で難読の箇所には□を施し、推定または判読が可能であれば、その中にその文字を示した。なお、『俳諧洗濯物』における虫損等で難読

の箇所は、その解説を洒竹文庫本・松宇文庫本に拠ったものが多く（ただし、第一巻についてののみ）、同様に『洗濯礫』においては、綿屋文庫本に拠ったものが多い（ただし、下巻についてののみ）。

七 脱字が存すると思われる箇所には、推定し得る文字を「」を付して補った。
八 振仮名は、すべて底本のままとした。

九 『俳諧洗濯物』では仮名（振仮名を含む）に適宜、濁・半濁音符を付したが、『洗濯礫』では地名等の読み方に清・濁・半濁音の判断に迷うものが多く存するので、濁・半濁音符を施すことは避けることとした。ただし、両本を通じて、底本に濁音符の存する場合には（ママ）印を付けた。

二 詞書・解説文・跋文等に適宜、句読点を施した。

二 『俳諧洗濯物』については、各巻別に句頭に番号を付けた。ただし、第四巻の一雪による富士百句は、他の句とは別に番号を付した。

三 『俳諧洗濯物』第四巻の末尾に掲げられる句引の収録句数には誤りが多く、正確な数字を注記した。なお、この句引には本文と一致しない姓・俳号が存

するので、本文・句引の両方にその旨注記した。また、句引に脱落している作者名・句数等を「」を付して補った。

三 各丁の表と裏の終わりの部分を」で示し、巻ごとにその丁数及び表裏を記した。なお、綿屋文庫本『俳諧洗濯物』は改装により一冊に合綴されているが、丁移りは各巻別に示した。また、『洗濯碁』における乱丁の箇所は、正しいと推定される順序に改め、丁数の示し方もそれに合わせた。

本書を成すにあたり、ご指導とご支援をいただいた大磯義雄（愛知教育大学名誉教授）・雲英末雄（早稲田大学教授）・塩村耕（椋山女学園大学短期大学部助教授）の諸先生（五十音順）、ならびに翻刻のご許可を下された天理図書館・柿衛文庫館に対して、深甚なる謝意を申し上げます。

『俳諧洗濯物』

全四卷

寛文六年序

俳諧洗濯物

(白紙)「一オ

洗濯物ハ、人々の手をへてひねり出せる、思ひの糸のすゝけぬるにて、手織にしける言葉の花の錦のきれぐゝをあらひすゝぎて、色よきをえらびあつめてはたバリひろき一まきとつゞりたる、針手のきゝたるしわざなるべし。いかなる水にてあらへるや。わらの灰汁に非ず。」
「ウしやほんに非ず。さいかちの実にあらず。是ハこれ雪げの水なり。此水のミなもとをたづぬれば、撰者一雪好士のむねのうちにつもれる、たびら雪の大きな作意、こゝめ雪のこまかなる趣向の、ふかく撰べるおもひにとけぬる心の水よりながれ出て、蜀江の浪に

も立まさ」²オれる成べし。抑、家くの誹諧の集ハ、奥山に八またの角あるかのし、もふミ分がたきまでふかくつもれる、紅葉の錦にまさり、奥州にひとり身にて有男の、かぞへがたきほど高く立そへぬる、千束の錦木も及がたし。かゝれば、すき人の心のくまぐに残る言葉の」²ウ夜の錦ハ、清絃が守袋ほども残らず、実盛がひたゝれのはれなる物となりけらし。かつまた、此集を洗へるを見れば、許由が耳のあながちにおもしろくして、久米の仙人の通をうしなひけんやうによだれ落けり。かくあつめてハ、たらひの底のあさき事ならねば、物ほし竿」³オのながき世につたハれど、くりごとのミせられける事ハ、いやをふをいはず洗濯物の序かけとあればなり。さるゆへに、黒犬のやうに年よりたる身ながら、灰汁のたれかすにおちはてず